

一般社団法人 日本独文学会  
JAPANISCHE GESELLSCHAFT FÜR GERMANISTIK E.V.

---

ニュースレター2022 秋号  
JGG-INFO-BLATT / HERBST 2022

2022/ 09/18 現在

## まえがき

会員の皆様

秋学会を間近に控え、2021年6月からの現理事会の任期も折返し点を過ぎました。依然として継続するコロナ禍に加え、ロシアのウクライナ侵攻の余波はドイツ政府による DAAD 事業の見直しという形で日本独文学会にも影響を与えることとなりました。3 ゼミナールをはじめとして、様々な事業を今後ますます日本独文学会単独で継続させていく必要に迫られています。会員数の自然減少のもと、従来の事業の見直しが極めて現実味を帯びてきているように思われます。

会長 井出万秀

## 目次

まえがき	2
2022 年秋季研究発表会について	4
2023 年春季研究発表会のご案内	5
Bekanntmachung der Frühlingstagung 2023	6
研究会開催のための会場借用について	7
Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2023	8
学会当日の受付用机・椅子の借用について	9
Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2023	10
第 21 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について	11
第 62 回ドイツ文化ゼミナールについて	13
第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールについて	14
2022 年度ドイツ語論文執筆ワークショップについて開催のご案内	15
DAAD 奨学金についてのご案内	16
DAAD-Stipendienprogramme	17
DAAD からのお知らせ	18
ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ (※2022/09/18 追加)	21
会費納入について	23
一般社団法人日本独文学会会費規程	24
第 19 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告 (日本語部門)	26
第 19 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告 (ドイツ語部門)	30
日本独文学会 2022 年春季研究発表会報告	38
2021 年度ドイツ文化ゼミナール・オンライン代替企画Ⅱ報告	39
第 26 回ドイツ語教授法ゼミナール報告	45
2021 年度ドイツ語教員養成・研修講座報告	50
日本独文学会研究叢書既刊一覧	52
支部報告	53
ドイツ語教育部会報告	58
2022 年度岩崎奨学金 (出版助成) について	61
大学院 Germanistik 関係博士論文題目	63
あとがき	64

## 2022 年秋季研究発表会について

2022 年の秋季研究発表会は、北海道支部の担当で 10 月 8 日（土）、9 日（日）に Zoom によるオンラインにて開催されることになった。シンポジウム 2 本、口頭発表 8 本、ブース発表 1 本、ポスター発表 1 本が予定されている。オンライン開催のため、学会員の参加費は無料、非学会員の参加費は 1,000 円となる。

（企画担当）

## 2023 年春季研究発表会のご案内

下記の通り，2023 年春季研究発表会を開催いたします。

期日：2023 年 6 月 3 日（土），4 日（日）（変更の可能性あり）

会場：明治大学駿河台キャンパス

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

[https://www.meiji.ac.jp/koho/campus\\_guide/suruga/access.html](https://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/access.html)

研究発表をご希望の方は「発表申込書 1（申込者情報）」（Excel 形式）をダウンロードし、「発表申込書 2（発表概要）」（Word 形式）と共に，日本独文学会ホームページ (<https://www.jgg.jp/>) 左メニュー「研究発表申し込み」にアクセスし、「[発表申し込みフォーム](#)」よりお申込みください。その際，必ず「研究発表申し込み要領（2020 年 2 月 1 日改訂）」をご熟読ください。申し込み審査のガイドラインもそこに記載されています。

申し込み締め切り：2022 年 12 月 4 日（日）

申し込み先：上記発表申し込みフォーム

2022 年 9 月

日本独文学会理事会

## **Bekanntmachung der Frühlingstagung 2023**

Die Frühlingstagung der JGG findet statt:

**am Sa., 3. und So., 4. Juni 2023 (Änderungen vorbehalten)**

**an der Meiji Universität Tokyo, Surugadai-Campus**

**Kanda-Surugadai 1-1, Chiyoda-ku, 101-8301 Tokyo, Japan**

[https://www.meiji.ac.jp/koho/campus\\_guide/suruga/access.html](https://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/access.html)

Wenn Sie sich als Referent\*in bewerben möchten, senden Sie uns bitte das ausgefüllte [Antragsformular](#) (Excel-Datei) und Ihr Exposé in Form einer selbst verfassten Word-Datei. Um sich anzumelden laden Sie bitte beides unter [Anmeldeformular \(発表申し込みフォーム\)](#) auf der JGG-Webseite hoch.

Detaillierte Informationen sowie alle notwendigen Upload- und Download-Links finden Sie unter [Referatsanträge](#) im linken Menü auf der JGG-Webseite (<https://www.jgg.jp/>).  
Der deutsche Text folgt dem Japanischen.

Anmeldefrist: **So., 4. Dezember 2022**

Anmeldung unter: siehe oben

September 2022

Vorstand der JGG

## 研究会開催のための会場借用について

2023 年春季研究発表会の折に研究会開催のための会場の借用をご希望の場合は、下記の要領でお申し込みくださいますようお願いいたします。

### 記

#### 1) 申し込み方法

必要事項をご記入のうえ、学会ホームページ上 (<https://www.jgg.jp/>) 「研究会開催のための会場借用申し込み」フォームよりお申し込みください。なお、会場および開催形式の関係で、すべてのご希望には添えない場合がございます。

申し込み期限：2022 年 12 月 4 日（日）

#### 2) 会場借用の時間帯

借用可能な時間帯は、学会 2 日目 6 月 4 日（日）の午後（13:15～16:00）です。

#### 3) 会場使用料

教室の使用に際しましては一定の使用料をいただくことになります。料金については、使用教室のご案内とともに、日本独文学会事務局より開催約 1 ヶ月前にお知らせします。

- ◎ 商行為を行うことはできません。
- ◎ 詳細は研究会責任者にご連絡いたします。

2022 年 9 月

日本独文学会理事会

## **Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2023**

Vereinen oder Arbeitsgruppen der JGG kann auf Wunsch bei der JGG-Frühlingstagung 2023 ein Raum zur Verfügung gestellt werden. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Gründen der begrenzten Anzahl der zur Verfügung gestellten Räume und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben. Bei der Raumbenutzung muss der Antragsteller mit entstehenden Kosten rechnen.

Anmeldefrist: So., 4. Dezember 2022

Das Anmeldeformular finden Sie auf der JGG-Webseite (<https://www.jgg.jp/>) bei **Tagungen** unter dem Punkt **Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung.**

### **Bitte beachten Sie:**

- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.
- Sie werden nach Bearbeitung Ihres Antrags etwa einen Monat vor Tagungsbeginn über Einzelheiten wie z. B. Informationen zu den Räumen und entstehende Gebühren benachrichtigt.

September 2022

Vorstand der JGG

## 学会当日の受付用机・椅子の借用について

2023年春季研究発表会の会場において、受付用に机・椅子の借用をご希望の場合は、下記の要領でお申し込みくださるようお願いいたします。なお、会場および開催形式の関係で、すべてのご希望には添えない場合がございます。

### 記

#### 申し込み方法

学会ホームページ上の「学会当日の受付用机・椅子の借用申し込み」フォームよりお申し込みください。

申し込み期限：2022年12月4日（日）

- ◎ 商行為を行うことはできません。
- ◎ 詳細は団体・研究会の責任者にご連絡いたします。

2022年9月

日本独文学会理事会

## **Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2023**

Vereine oder Arbeitsgruppen der JGG können auf der JGG-Frühlingstagung 2023 einen Infostand (mit Stühlen) aufstellen. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Platzgründen und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben.

**Anmeldefrist: So., 4. Dezember 2022**

Das Anmeldeformular finden Sie im linken Menü auf der JGG-Webseite (<https://www.jgg.jp/>) bei **Tagungen** unter dem Punkt Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung.

### **Bitte beachten Sie:**

- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.
- Nach Bearbeitung der Anmeldung wird der Antragsteller über die Einzelheiten benachrichtigt.

September 2022

Vorstand der JGG

## 第 21 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について

第 21 回日本独文学会賞の選考対象業績を下記の要領により募集します。ふら  
ってご応募ください。

### 記

#### 1 選考対象

日本独文学会員が執筆し、2022 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに刊行ないし印  
刷公表されたドイツ文学、ドイツ語学、ドイツ語教育、ドイツ語圏の文化・社会  
等に関する研究書および論文。自薦、他薦は問わない。なお、日本独文学会機関  
誌に掲載の論文は自動的に選考の対象となる。

#### 2 部門と選考

次の部門ごとに設けられた選考委員会が、選考にあたる。

日本語研究書部門

ドイツ語研究書部門

日本語論文部門

ドイツ語論文部門

#### 3 年齢制限

日本語研究書部門およびドイツ語研究書部門では特に年齢制限を設けないが、  
日本語論文部門およびドイツ語論文部門についてはドイツ語学文学振興会賞との  
重複を避けるため、論文の印刷公表年の 12 月 31 日現在で 36 歳以上の執筆者の  
論文に限る。

#### 4 応募方法

当該の研究書または論文の原本 1 部を、論文の場合は執筆者の生年月日を明記  
の上（他薦の場合で生年月日が不明なら、その旨を記すこと）下記宛てに 2023 年  
3 月 31 日までに送付する。封筒には「学会賞応募」と朱書すること。

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

Tel: 03-5950-1147

## 5 選考結果の発表

2023 年度末頃に学会ホームページで公表する。

## 6 授賞件数

日本語研究書部門・ドイツ語研究書部門：それぞれ 1 件程度 日本語論文部門・ドイツ語論文部門：それぞれ 2 件程度

## 7 授賞式

授賞式において、受賞者に賞状と副賞を授与する。授賞式は 2024 年春季研究発表会において行う。

## 第 62 回ドイツ文化ゼミナール開催について

第 62 回ドイツ文化ゼミナールは、2023 年 3 月に開催する予定である。詳細が決まり次第、日本独文学会ホームページで告知し、参加者募集を開始する。

### **Zum 62. Kulturseminars**

Das 62. Kulturseminar wird voraussichtlich im März 2023 veranstaltet. Sobald die Einzelheiten festgelegt sind, werden sie umgehend auf der JGG-Webseite bekannt gemacht und die Anmeldung wird dann möglich sein.

## 第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールについて

第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールは、2023 年 3 月に開催する予定である。詳細が決まり次第、日本独文学会ホームページにて告知し、参加者募集を開始する。

### **Zum 27. DaF-Seminars der JGG**

Das 27. DaF-Seminar wird voraussichtlich im März 2023 stattfinden. Sobald Näheres feststeht, werden die Informationen auf der Homepage der JGG bekannt gegeben.

(文責：草本晶)

## 2022 年度ドイツ語論文執筆ワークショップについて

開催の有無を含め、詳細は後日、日本独文学会ホームページ上で発表いたします。

## DAAD 奨学金についてのご案内

ドイツ学術交流会（DAAD）は現在、下記の奨学金プログラムへの応募者を募集しています。応募締め切りや提出書類はプログラムによって異なりますので、詳細は DAAD のホームページから募集要項をご確認ください。

<https://www.daad.jp/scholarships>

### ① 留学奨学金

対象：全ての学部卒業生又は卒業見込みの方（芸術分野を除く）

給付期間：10～24 ヶ月（2023 年 10 月～給付開始）

審査方法：1 次（書類），2 次（面接）

応募締切：2022 年 10 月 20 日

### ② 芸術奨学金

対象：芸術分野（音楽・美術・建築など）の学部卒業生又は卒業見込みの方

給付期間：10～24 ヶ月（2023 年 10 月～給付開始）

審査方法：書類・作品審査

応募締切：（音楽）2022 年 9 月 29 日

（建築）2022 年 9 月 30 日

（パフォーミングアーツ）2022 年 11 月 2 日

（造形芸術・デザイン・映画）2022 年 11 月 30 日

### ③ 研究奨学金（長期）

対象：修士号を取得した又は取得見込みの方

給付期間：7～48 ヶ月（2023 年 10 月～給付開始）

審査方法：1 次（書類），2 次（面接）

応募締切：2022 年 10 月 20 日

ドイツ語研修奨学金（HSK/HFK）、研究奨学金（短期）、大学教員・研究者のための研究滞在奨学金、および DAAD 奨学生再招待奨学金は、2023 年度は募集停止となりました。何卒ご了承くださいませ。

奨学金に関する最新情報は常に DAAD 東京事務所のホームページ([www.daad.jp](http://www.daad.jp))をご確認ください。また、何かご不明な点がございましたら、[scholarships@daadjp.com](mailto:scholarships@daadjp.com)までお問い合わせください。以上、何卒宜しく願いいたします。

## DAAD-Stipendienprogramme

Derzeit sind folgende Stipendienprogramme ausgeschrieben. Bitte entnehmen Sie weitere Informationen zum jeweiligen Programm der Webseite des DAAD Tokyo: <https://www.daad.jp/scholarships>

### 1. Studienstipendien – Masterstudium für alle wissenschaftlichen Fächer

Zielgruppe: Graduierte

Dauer der Förderung: 10–24 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl & Interview

Bewerbungsfrist: 20.10.2022

### 2. Studienstipendien – Masterstudium für künstlerische Fächer

Zielgruppe: Graduierte eines künstlerischen Fachbereiches

Dauer der Förderung: 10–24 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl & Einreichen einer Arbeitsprobe

Bewerbungsfristen:

- ✧ Musik: 29.09.2022
- ✧ Architektur: 30.09.2022
- ✧ Darstellende Kunst: 02.11.2022
- ✧ Bildende Kunst, Design und Film: 30.11.2022

### 3. Forschungsstipendien (lang)

Zielgruppe: Doktorand\*innen

Dauer der Förderung: 7–48 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl & Interview

Bewerbungsfrist: 20.10.2022

Bitte beachten Sie, dass für das Jahr 2023 die Ausschreibungen für die Hochschulsommer- und -frühlingskursstipendien (HSK/HFK), die Forschungskurzstipendien, die Forschungsaufenthalte für Hochschullehrende und Wissenschaftler\*innen sowie die Wiedereinladungen für ehemalige DAAD-Stipendiat\*innen leider ausgesetzt werden mussten. Aktuelle Informationen finden Sie auf der Website der DAAD-Außenstelle Tokyo ([www.daad.jp](http://www.daad.jp)). Bei weiteren Fragen steht Ihnen Herr Kurushima ([scholarships@daadjp.com](mailto:scholarships@daadjp.com)) gerne als Ansprechpartner zur Verfügung.

## DAAD からのお知らせ

### DAAD よりイベント開催のお知らせ

フリードリヒ・シラー大学イェーナ, ミヒャエル・シャールト氏によるオンライン講義 | Online-Vortrag von Prof. Dr. Michael Schart (Friedrich-Schiller-Universität Jena): „Konsequent aufgabenbasiert unterrichten – Was ist das? Wie geht das? Was bringt das?“

#### Abstract

Das Entscheidende am aufgabenbasierten Unterricht sind nicht die Aufgaben! Ausgehend von dieser These möchte ich im ersten Teil des Vortrags die theoretischen Grundlagen dieses fremdsprachendidaktischen Ansatzes in den Blick nehmen. Ich werde aufzeigen, dass es einer bestimmten Perspektive auf die Lernziele und die Lernprozesse bedarf, um diese Form des Unterrichtens als sinnvoll zu empfinden. Der aufgabenbasierte Ansatz wird nicht als die bessere Methode präsentiert, sondern als eine Möglichkeit, den Unterricht anspruchsvoll, motivierend und zugleich effektiv zu gestalten. Im zweiten Teil möchte ich anhand von Beispielen aus meiner langjährigen Arbeit mit konsequent aufgabenbasierten Designs veranschaulichen, wie dieser Ansatz auf allen Niveaustufen umgesetzt werden kann.

#### 開催日時 | Veranstaltungsdaten

2022 年 10 月 12 日 (水) 18 時から 19 時半まで (オンライン)

Mittwoch, 12. Oktober 2022, 18.00–19.30 Uhr (JST) (online)

申し込み : 9 月初旬以降 (詳細は会員用フォーラムでお知らせします。)

Anmeldung: ab Anfang September (Details folgen über das Mitgliederforum.)

## ネイティブ ドイツ語担当教員の方にぜひお知らせ願います！

皆様の職場にドイツ語を母語とするドイツ語教員の方はいらっしゃいませんか。もしいらっしゃったら、その方に以下の情報をお知らせいただけませんか。

お知らせいただきたいのは、「DAAD のドイツ語担当招聘教員プログラム」です。多くのドイツ人ドイツ語教員にはよく知られたプログラムです。対象は、ドイツ以外の国の大学で主としてドイツ語・ドイツ文学等、ドイツに関係する学科を受け持つドイツ語が母語のすべての教員です（ドイツ人に加え、ドイツ語が公用語のオーストリア、スイス、ベルギー、リヒテンシュタイン、ルクセンブルグ国籍の教員も含まれます）。同プログラムの助成対象になると、様々なキャリアアップ研修の機会が提供されるだけでなく、現所属大学における様々なプロジェクトに対する助成を受けることができ、本や専門誌などを無料で送付してもらうこともできるため、所属部署にもメリットがあります。

DAAD はドイツ語教員の着任情報をすべて把握しているわけではありませんので、ネイティブドイツ語教員着任時に、このプログラムの存在をお伝えいただきたいようお願い申し上げます。このプログラムの詳細は下記リンク先にてご確認いただけます。

<https://www.daad.de/de/im-ausland-studieren-forschen-lehren/lehren-im-ausland/ortslektorenprogramm/>

ご不明な点がございましたら、Manuela Sato-Prinz（DAAD 特任講師，[lekt\(at\)daadjp.com](mailto:lekt(at)daadjp.com)）までお気軽にお問合せください。

## **Ortslektor\*innen gesucht!**

Viele der deutschen Dozent\*innen kennen es schon: Das Ortslektorenprogramm. Das vom DAAD finanzierte Programm richtet sich an deutschsprachige Hochschuldozent\*innen (d. h. mit der Staatsbürgerschaft eines Land mit Amtssprache Deutsch – also Deutschland, Österreich, die Schweiz, Belgien, Liechtenstein und Luxemburg), die im Ausland tätig sind und in der Regel im Bereich Deutsch/Germanistik/sonstiger Fächer mit Deutschlandbezug unterrichten. Indirekt profitieren jedoch auch die Abteilungen der deutschsprachigen Kolleg\*innen von einer Mitgliedschaft, denn der DAAD bietet Teilnehmenden des Programms nicht nur unterschiedliche Möglichkeiten der fachlichen Fortbildung an, sondern auch eine finanzielle Förderung von Projekten an den Hochschulen sowie kostenlose Bücherpakete oder Fachzeitschriften, die im Kollegium geteilt werden können. Da wir es nicht immer erfahren, wenn Stellen neu besetzt werden, würden wir uns sehr freuen, wenn Sie Ihre deutschsprachigen Kolleg\*innen auf das Angebot hinweisen würden. Weitere Informationen über das Programm finden Sie hier: <https://www.daad.de/de/im-ausland-studieren-forschen-lehren/lehren-im-ausland/ortslektorenprogramm/>  
Für Rückfragen steht Ihnen die DAAD-Lektorin z.b.V. an der Außenstelle Tokyo, Manuela Sato-Prinz (lekt(at)daadjp.com), gern zur Verfügung.

ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ  
(※2022/09/18 追加)



ゲーテ・インスティトゥート（ドイツ文化センター）は、大学・高等専門学校・高等学校のドイツ語教育担当教員を対象に、ドイツ語教員向け奨学金プログラムを実施しています。2023年度募集予定のプログラムは以下の通りです。

1. ドイツ語教員のためのランデスクンデ・教授法ゼミナール（2週間）
2. ドイツ語学コース（2-4週間）
  - \* 研修期間中の研修費用がゲーテ・インスティトゥートより支給されます。ドイツで実施の場合はそれに加えて宿泊費全額、ならびに旅費の補助金が支給されます。

< プログラム応募資格 >

大学または高等学校、高等専門学校でドイツ語を教えている、またはドイツ語教員養成に携わっている方のうち、次の条件を満たす方

- 過去数年間にドイツ政府の奨学金を受けていない
- これまでドイツ語教育とその促進に貢献しており、研修終了後少なくとも数年間、ドイツ語教育に携る予定である
- 研修で得た知識を、今後のドイツ語教育に役立つようフィードバックする意志がある
- 研修の全プログラムに参加できる
- 研修の前提となる必要なドイツ語力を備えている

詳細は、2022年夏以降、ホームページの申込要領をご確認の上、**2022年10月10日**までにメールの添付でお送りください

問い合わせ/申込：ゲーテ・インスティトゥート東京  
ドイツ語教員研修支援プログラム係

**TEL:03-3584-3201** E-Mail: [stipendien-tokyo@goethe.de](mailto:stipendien-tokyo@goethe.de)

## DEUTSCH LEHREN LERNEN



Als Antwort auf die veränderten Anforderungen der Lehrkräftequalifizierung hat das Goethe-Institut die Fort- und Weiterbildungsreihe DLL – Deutsch Lehren Lernen zur weltweiten Qualifizierung von Lehrkräften für Deutsch als Fremdsprache sowie Deutsch als Zweitsprache gemäß dem aktuellen fachdidaktischen Wissensstand entwickelt.

Fortbildungen mit DLL führen zu einer Aktualisierung des in der Ausbildung erworbenen Wissens, zu einer Erweiterung des fachdidaktischen Wissens und der Unterrichtskompetenz und zu einem Erwerb zusätzlicher formaler Qualifikation.

DLL richtet sich an Lehrende des Faches Deutsch als Fremdsprache im Primarbereich, in der Sekundarstufe und in der Erwachsenenbildung mit Unterrichtserfahrung. Die Teilnahme ist für DaF-Lehrende mit formaler Ausbildung oder ohne formale Ausbildung möglich. Voraussetzung für eine erfolgreiche Teilnahme sind Sprachkenntnisse auf dem Niveau B2 nach dem Gemeinsamen Europäischen Referenzrahmen.

Das Goethe-Institut Tokyo bietet die DLL-Einheiten 1-6 in Form eines regionalen DLL-Zyklus regelmäßig an. Pro Jahr werden fünf Einheiten durchgeführt. Eine DLL-Einheit wird über einen Zeitraum von 9 Wochen bearbeitet und mit einem Praxiserkundungsprojekt (PEP) abgeschlossen.

**Mehr Information finden Sie hier: [Deutsch Lehren , Lernen - Goethe-Institut Japan](#)**

## 会費納入について

会員の皆様におかれましては、すみやかな会費納入にご協力いただきありがとうございます。ありがとうございます。

事務局では会員お一人お一人の会費ご納入に関して、年間を通じ必要に応じてご連絡を差し上げています。その際にご理解、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

また、以下の点をご確認ください。

### 【会費割引制度】

前年度末までに 80 歳になられた方、常勤職をお持ちでない方、学生の方は、ご本人からのお申し出によって、年会費の割引を受けられます。会費規程をご確認の上、事務局までお申し出ください。

### 【口座自動振替によるご納入】

口座自動振替のお申込みは随時受け付けています。まだお申込みでない方は是非ご検討ください。申込書をお持ちでない方は事務局までご連絡ください。お申込みくださった時点でその年度の手続き締切りに間に合わなかった場合は、自動的に次年度開始の扱いとなります。その年の年会費は振込にてご納入くださるようお願い致します。

振替日は年に一度のみ、毎年 7 月 1 日（1 日が土日の場合は 2 日または 3 日）です。7 月 1 日に振替ができなかった場合は、改めて郵便振込をお願いしています。

振替口座等の変更や年会費割引をご希望の場合は、4 月末までに事務局にご連絡ください。

### 【郵便振込によるご納入】

口座自動振替をお申込みいただいてない方には、5 月から夏にかけて学会年会費納入のお願いと払込取扱票をお送りしています。

以上、よろしくお願い申し上げます。ご不明の点、ご質問は事務局（TEL./FAX：03-5950-1147, Mail フォーム：<http://www.jgg.jp/mailform/buero/>）までお問い合わせください。

日本独文学会事務局

# 一般社団法人日本独文学会会費規程

(2019年6月8日施行)

(目的)

第1条 この規程は、定款第7条の規定に基づき、入会金及び会費の納入に関し、必要な細則を定めるものとする。

(入会金)

第2条 会員は入会金として1,000円を納入しなければならない。

(入会金の納期)

第3条 入会金は、この法人から入会承認の通知を受けた日から30日以内に納入しなければならない。

(会費)

第4条 会員は、次の会費（年額）を納入しなければならない。

正会員 10,000円

賛助会員 30,000円（学術交流団体など非営利団体の場合10,000円）

(会費の納期)

第5条 会員は、当該事業年度開始の7月末日までに、会費年額の全額を納付しなければならない。

(会費の減免)

第6条 4月1日現在で常勤職を持たない正会員の当該年度会費は、本人の申告に基づいて8,000円とする。

2 4月1日現在で大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の当該年度会費は、本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は、6月1日までに学生証ないしはそれに相当する証明書のコピーを郵送もしくはファックスで学会事務局に提出することによって行うものとする。

3 4月1日現在で満80歳以上の正会員の年度会費は、本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は6月1日までに行うものとする。

- 4 会費の減免は申告が受理された年度から適用し、遡って適用されることはない。
- 5 常勤職を持たない正会員が常勤職に就いた場合は、身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。
- 6 大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の身分に変更があった場合は、身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

(使用目的)

第7条 入会金及び会費は次の各号に定める事項に使用する。

- (1) 本会の運営
- (2) 本会の機関誌等の発行

(細則)

第8条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に必要な事項は、理事会の決議により別に定めることができる。

(改廃)

第9条 この規程の改廃は、総会の決議による。

## 第 19 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（日本語部門）

日本独文学会・DAAD 賞日本語部門選考委員会は、2022 年 3 月 19 日に第 1 回、6 月 1 日に第 2 回、6 月 28 日に第 3 回の委員会を開催した。3 回とも Zoom によるオンライン会議方式であった。

選考委員は、大宮勘一郎（委員長）、河崎靖、川島建太郎（DAAD 推薦）、杵渕博樹（第 3 回委員会より追加）、細見和之、安川晴基の 6 名である（敬称略）。

今回審査対象となったのは、研究書部門 3 点、論文部門 8 点であった。

第 1 回委員会では、審査対象の分担と審査方法を協議した。審査対象の分担については、1)委員それぞれの研究領域に近い著作・論文を委員本人の希望にもとづき審査すること、2)すべての対象作は複数の委員が審査することとした。審査方法については、各委員が分担した著作・論文についての評価をアンケート方式で集約し、評価の高いものについて後日に合同で討議することとした。

第 2 回委員会では、各委員が審査報告を行い、それに続いて合同で討議した。この時点で、著作 2 点、論文 3 点まで対象を絞り込み、次回までにそれを全員が精読し、合同の討議にもとづき最終決定を行うこととした。

第 3 回委員会では、各委員が審査報告を行い、合同で討議した結果、以下の結論を得た。

1) 研究書部門では、次の 2 点を日本独文学会・DAAD 賞候補として推薦する。  
福元圭太『賦霊の自然哲学—フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ』（九州大学出版会、2020 年）

金志成『対話性の境界—ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学』（法政大学出版局、2020 年）

2) 論文部門では、次の 1 点を日本独文学会・DAAD 賞候補として推薦する。  
菅利恵「市民、人間、世界市民—ヴィーラントのコスモポリタニズムと市民的公共圏」（『ドイツ文学』160 号）

以下に推薦理由を述べる。

### 日本語研究書部門

福元圭太『賦霊の自然哲学—フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ』（九州大学出版会、2020 年）

本書は、実証主義的な自然科学が急速に発達した 19 世紀から 20 世紀前半にかけての時期に、あえて科学から距離を取り、思弁的な「自然哲学」を展開したネオ・ロマン主義的な思想家たちの系譜をたどる。取り上げられるのは、「魂を物理的に計測」できると考えた物理学者フェヒナー、ダーウィンの進化論を（やや歪

んだ形で) ドイツ語圏に紹介しつつ「一元論」の思想を唱えたヘッケル、生物学者から哲学者に転向し、物質でもエネルギーでもない「エンテレヒー」の作用で万物を説明しようとしたドリーシュの三人である。

三人はいずれも、自然科学の方法を学んだ後に、その方向を反転させるかのように汎神論的な傾向を強め、万物には霊が宿るという考えに行き着いた。彼らの思考は多かれ少なかれ、オカルト的なものに近接している。今日的な価値観からすれば、一種の際物にも見られかねないが、フロイトとの接点の多さからも窺えるように、同時代の文脈における重要さは疑い得ない。本書の記述からは、進歩的な自然科学の世界観の背後にあったオルタナティブな思想史の存在が立ち上がってくる。

ただし、著者の福元氏は、この三人を、けっして礼賛するために取り上げているのではなく、冷静な筆致で彼らの思想のアウトラインを描き出している。しかしながら、この三人への着目を通じて開かれる思想史の新たな視界の広がり、福元氏自身も少なからず魅惑されているようにも見える。アドルノらが指摘した啓蒙の暴力の問題性から、我々は誰も逃れることができていない。その意味で、本書で取り出されている反啓蒙の思想的系譜は、今日なお切実なものだと言える。

本書の記述はきわめて重厚であり、読みごたえがある。やや重厚すぎるのではないか、もっと記述を切り詰めて読みやすくすることもできたのではないかとといった指摘も出されたが、それは本書の価値を否定するものではない。なお、福元氏は2005年の著書『「青年の国」ドイツとトーマス・マン—20世紀初頭のドイツにおける男性同盟と同性愛』でも学会賞を受賞しているが、本書はこの前著の問題意識や方法論を引き継ぎつつ、前著を上回るスケールの議論を展開したものであり、受賞にふさわしいという点につき、選考委員の意見は一致した。

### 金志成『対話性の境界—ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学』(法政大学出版局, 2020年)

ウーヴェ・ヨーンゾンは第二次世界戦後のDDR文学を代表する作家の一人であり、ドイツとアメリカではつとに研究が進んでいる。にもかかわらず、日本国内ではけっして研究が盛んとは言えなかった。本書はヨーンゾンを取り上げた日本初の単著書であり、日本発でヨーンゾン研究の新たな地平を切り開こうとした力作である。

本書の問題設定の中心には、ヨーンゾンの「詩学」がある。すなわち、作家自身が自らの文学についてどのように語り、それが彼の文学に実際にどのように反映されているか、といった問題圏である。かつて、ドイツのヨーンゾン研究においては、戦後のDDRの政治体制下で作家が占めていた位置についての研究が主流で、アメリカにおいては、作家の文学的手法についての研究が重きをなしてい

た。1990年代以降は両者を統合する形でヨーンゾン研究の制度化が進み、そこでは「詩学」は日陰のテーマとなっていた。著者の金氏は、そのテーマをあえて取り上げ、新たに光を当てている。

もとより、一人の作家が自らの文学について自己申告していることを字義通りに受け取ることは許されない。しかも、ヨーンゾンは自らのテキストの「詩学」的性格を否定している。しかし、金氏は『ベルリンのSバーン』をはじめとするヨーンゾン初期の「詩学」的なニュアンスのあるテキスト群を、それ自体として文学的なものとして読む一方、『ヤーコプについての推測』などの小説群をそれと連続的なものとして読むことを試みる。その際、導きの糸となるのは、ポール・ド・マンがバフチンの『ドストエフスキーの詩学』から抽出した「対話」の概念である。登場人物が作者の手を離れ、他者の声をテキスト内に導入することによって、テキスト自体が「対話」の様相を呈する。この性格はヨーンゾンの文学全体に底流するものであるが、彼の詩学的構想はしばしば限界に突き当たってもいる。そのことを本書は明らかにしようとする。

これまでの世界のヨーンゾン研究史をスマートにまとめ、先行研究と対決しながら自らの研究の立ち位置を定めてゆく著者の力量はきわめて高く評価される。文体は華麗で、本全体として「読ませる」ものになっている。その一方で、独自のテーゼとして提示されている議論がエッセイ的で、やや粗いのではないかとの指摘もあった。総合的に見て、日本におけるヨーンゾン研究の里程標となるべき本書の価値は揺るがず、受賞に値すると判断した。

## 日本語論文部門

### 菅利恵「市民、人間、世界市民—ヴィーラントのコスモポリタニズムと市民的公共圏」(『ドイツ文学』160号)

菅利恵氏の論文は、『ドイツ文学』160号の特集「文芸公共圏」の一環として掲載されたものである。かつてハーバーマスは市民的公共圏を論じる際、社会変革をもたらす政治公共圏の前段階をなす文芸公共圏の成立の要件として、友人や家族や恋人同士といった人間関係に特徴的な「小家族的な親密さ」を挙げた。それに対して本論文は、近代的小家族に見られる閉鎖的な親密圏における現象ではなく、むしろ特定の「圏」を超えてつながろうとする「コスモポリタン」の像に目を向ける。そして、この像が近代的な「人間」の理念に実体を与え、市民的公共圏の成立に寄与した側面を論じている。

本論文はまず、ヴィーラントの市民社会論をルソーのそれと比較しつつ、前者においては「市民」の主体化という契機が希薄だった点を指摘する。しかし、ヴィーラントのそのような後進性は、かえって（「市民」ならざる）「人間」を、特

定の政治的共同体に縛られず、その外に出る存在、すなわち「コスモポリタン」として高く評価することにつながったという。この人間像はハーバーマスの意味における批判的機能を高度に備えており、言論の自由を強く志向していたとされる。そして、ルソーや、20世紀にルソーの社会契約論を継承したロールズの議論において、基本的に「自己完結した国民共同体」が社会的正義の適用範囲とされていたのに対し、ヴィーラントの議論はその枠組みを超えていくポテンシャルを秘めている。市民層の形成が遅れたドイツ発の思想だからこそ、現代の観点からしても革新的と言えるような立場を打ち出し得たという逆説が、ここには見られる。

もとよりハーバーマスの公共圏論はメディア論的な性格が強く、近代における社会構造の変化とメディア構造の変化の重なり合いに焦点を合わせているのに対し、本論文はヴィーラント個人の思想に的を絞っており、話のレベルが多少ずれ違っている観は否めない。また、特集論文の一本としての性格上、独立した論文としては厚みが足りないとの指摘も出た。しかし、ドイツの近代化の過程でドイツならではの特殊事情から生まれた民主主義思想の一局面を切り出した意義は大きく、受賞に値すると結論した。

(文責：大宮勘一郎)

## 第 19 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（ドイツ語部門）

日本独文学会・DAAD 賞ドイツ語部門選考委員会は、2022 年 3 月 31 日に第 1 回、6 月 2 日に第 2 回、6 月 27 日に第 3 回の委員会を開催した。3 回とも Zoom によるオンライン会議方式であった。

選考委員は、生駒美喜、糸川麻里生（委員長）、林明子、藤井明彦、Thomas Pekar（DAAD 推薦）の 5 名である（敬称略）。

今回審査対象となったのは、研究書部門 2 点、論文部門 9 点であった。

第 1 回委員会では、審査対象の分担と審査方法を協議した。審査対象の分担については、1)委員それぞれの研究領域に近い著作・論文を委員本人の希望にもとづき審査すること、2)すべての対象作は複数の委員が審査すること、とした。審査方法については、各委員が分担した著作・論文についての評価をアンケート方式で集約し、評価の高いものについて後日に合同で討議することとした。

第 2 回委員会では、各委員が審査報告を行い、それに続いて合同で討議した。この時点で、著作 2 点、論文 3 点まで対象を絞り込み、次回までにそれを可能な限り全員が精読し、合同の討議にもとづき最終決定を行うこととした。

第 3 回委員会では、各委員が審査報告を行い、合同で討議した結果、以下の結論を得た。

1) 研究書部門では、次の 2 点を日本独文学会・DAAD 賞候補として推薦する。

Mariko MORISAWA (森澤万里子): *Relativsatzeinleitungen in der Nürnberger Stadtsprache aus dem 16. Jahrhundert. Eine historisch-soziolinguistische Analyse.* Peter Lang, 2020.

Daisuke YANAGIBASHI (柳橋大輔): *Metaphorologie des Kinos. Sprachbilder und Intermedialität im literarischen Kinodiskurs der Klassischen Moderne.* transcript, 2020.

2) 論文部門では、該当なしとする。

以下に推薦理由を述べる。

### ドイツ語研究書部門

**Mariko MORISAWA: *Relativsatzeinleitungen in der Nürnberger Stadtsprache aus dem 16. Jahrhundert. Eine historisch-soziolinguistische Analyse.* Peter Lang, 2020.**

本書は、16 世紀ニュルンベルクにおける都市言語の特徴を、特に関係文を導く関係（代名）詞/*der*/, *so*/, *welcher*/の使用について、歴史社会言語学の手法で分析したものである。コーパスとしては手書きの文書と印刷物の双方を用い、前者につ

いては①公文書 (Kanzleitexte), ②男性 (商人・学生) の手になるテキスト, ③修道女以外の女性 (主婦, 主婦になる女性) のテキストという3種類の社会集団のテキストを取り上げている。後者については, ①宗教書, ②専門書, ③広報文書 (Neuigkeitsberichte) を区別している。16世紀を前半と後半に分け, 時間的な経過がもたらした変化も考慮されている。

たとえば手書き文書については, 男性の言語使用において公文書の影響が見られ, /der/よりも高尚な言葉遣いと見なされた so, /welcher/が目立つのに対し, 女性の場合は当初はそうではなかったが, 世紀の後半では so, /welcher/が用いられるようになり, 公文書や男性の言語使用への接近が見られるという。一方, 印刷物の場合は, 世紀前半は比較的均質であったが, 世紀後半になると広報文書が so, /welcher/を多用するようになるという。

膨大な量のコーパスを丁寧に読みほどこくことによって着実な結論に到達した労作であり, 資料的価値も高い。その一方で, 記述の繰り返しが多いとの指摘や, 手書き公文書が最も保守的で, 印刷物の広報ジャンルが最も革新的であるといった結論はそれほど目新しいものではないとの指摘も出たが, 日本発で社会言語学のドイツ語著書を刊行することの意義は十分に大きく, 総合的に見て受賞に値すると判断した。

**Daisuke YANAGIBASHI: Metaphorologie des Kinos. Sprachbilder und Intermedialität im literarischen Kinodiskurs der Klassischen Moderne. transcript, 2020.**

本書は, 映画の黎明期において映画がどのようなメタファーで語られたかを考察したものである。19世紀末に登場した新メディアである映画は, 当時の知識人たちによってしばしば否定的に語られたが, 否定的な言説の背後に, 映画に魅惑された人々の心情が隠れていることも珍しくなかった。本書では, そうした状況下で用いられたメタファーを通じて映画というものの文化史的位置を探ろうとする斬新な試みが展開されている。

著者は本書において, ソンタグのメタファー批判に接続しつつもそこから距離を取り, メタファーが生み出すイメージというものがときに生産的に働くことに着目する。たとえば, 初期の映画の観客は子どもであり, 映画そのものが「子ども」のメタファーで語られることもよくあった。それは, 映画が「原始的」なものへの退行を促すメディアとして警戒されていたことと関係があるが, このイメージは, トゥホルスキーやベンヤミンの事例に見られるように, 腐敗した文明からの解放として肯定的に読み換えられることもあったのである。

本書の構想はきわめて壮大であるが, 扱う対象の絞り込みがなされておらず,

テーマがやや茫漠としているとの指摘もなされた。しかし、メタファーの生産的機能に着目するという構想は一貫しており、また、カフカ、ヨーゼフ・ロート、ベン、デーブグリーンといった作家たちと映画との関わりを明らかにするという点においても、多くの読者にとって興味深い著作となっていることは間違いない。以上を勘案し、受賞に値するという結論にいたった。

(文責：糸川麻里生)

本書を構成する最も古い論稿は 2001 年のヘッケル論に遡る。20 年間書き溜めてきた論稿を一冊の書物に編むに当たって、実を言えば途方に暮れた。いったい私はこの 20 年、どのような問いに憑かれ、何を巡って彷徨してきたのであろう。

科研の「研究成果公開促進費」に本書のもとになった原稿を申請した。結果は不採用、評価は「当該分野における貢献度が不明」の 1 行。本書の「当該分野」とはどこなのか考え込んだ。また、結局はその全額出資によって本書を上梓することができた九州大学出版会の「学術図書刊行助成」でも、匿名の査読者から「孤独な研究者が持論を書き連ねている印象がある」という評価。特段孤独ではないのだが、と思いながらも、ただ「持論を書き連ねて」いたのはその通りであった。

素材が揃っていても実際に書物として書き始めるには「さらに何かが必要」で、問題の核心へと沈潜し、あとは筆の方が先導してくれるような衝動を得るためには「しばしば苦しい努力」が必須である、と言ったのはベルクソンである（『思想と動くもの』）。ベルクソンにとってこの「衝動」とは「直観」の謂である。自らの諸論稿を貫く「赤い糸」を発見するに際しては、私にもある種の「直観」がはたらいたのかもしれない。「私が憑かれている問いは何か」という核心に深く沈潜し—洒落ではなく自宅の湯船で **Heureka!**— 溺れそうになった底で見つけた「赤い糸」は「ネオ・ロマン主義的自然哲学」、極言すれば「自然科学的数量化を前にした質の救済」であった。そこからは「筆の方が先導」してくれ、大幅に論稿を組み直し、加筆修正を施して本書が今の形に成った。

大部になった本書をお読みいただいた審査員の方々に心から感謝申し上げる。この賞を頂いたのは前著に次いで 2 度目である。素直に嬉しい。受賞の嬉しさとは異なる、やや込み入った、ある種の「誇らしさ」を感じてもいる。それは、曇りない目で誠実に学知を探求し、何度目であるかなどに関係なく、対象の価値を秤量することに直向きな審査員の方々と私が、同じ志操を持った仲間であり、学会というコミュニティーを形成することが私に許されている、という「誇らしさ」である。つまり、審査員の方々と私が学知に奉仕する **Kollege** であること、いな、言葉の本来の意味で **Genosse** であることこそが、私にとって誇らしいのである。

(九州大学教授)

このたびは日本独文学会・DAAD 賞を頂き、大変光栄に存じます。審査くださった選考委員のみなさまに心よりのお礼を申し上げます。

『対話性の境界』は早稲田大学に提出した博士論文が元となっています。2016年の暮れに序論を書いてみて手応えを感じ、それから夏までの八ヶ月くらいの期間に集中して書き上げました。大学や都心から離れた横浜の郊外に住み始めた頃で、近所の高校で週一日の非常勤講師をする以外は、家で毎日ひたすら書いていたように思います。

六年前に、まだ二十代の頃に書いた『対話性の境界』のテキストは、書いた本人にとってすでに他者となっています。本書の企図は、日本ではあまり知られていないヨーンゾンという作家の全体像を可能な限り明確に示すことにあったはずですが、それが果たしてどれほど成功しているのか甚だ自信がありません。他者となった一読者の目で読み返すと、本書の提示するヨーンゾン像はずいぶん特異なものに映ります。しかしそれだけに、逆説的ではありますが、ほかならぬ自分が書いた本だなという気もしてきます。

なかば勢い任せに書いた（文字どおりの意味での）拙稿が、ブラッシュアップされて学位論文となり、単著となり、このたび学会賞という身に余る評価を頂けたのは、どこまでも指導教授の山本先生をはじめとする主査・副査の先生方、法政大学出版局の刊行助成の審査を引き受けてくださった方ならびに編集を担当してくださった前田さんのおかげです。改めて感謝を申し上げます。

最後にこの場をお借りして、藤本淳雄先生への感謝を述べさせていただきます。ご生前お目にかかることは残念ながら叶いませんでしたが、先生による『ヤーコプについての推測』の翻訳がなければ私がヨーンゾンという作家を研究対象に選ぶことはなく、本書が書かれることもありませんでした。心からご冥福をお祈りします。

（東京都立大学准教授）

このたびは第 19 回日本独文学会・DAAD 賞に選考いただき、とても光栄に思います。論文が出来上がるまでの道のりで後押しをしてくださった方々、また選考のために論文を読んでくださった方々にも、心から感謝いたします。

今回の受賞論文の主題は「コスモポリタニズム」ですが、私はこれまでの研究ではもっぱら、家族を中心とする私的な領域をあつかってきました。18 世紀の市民劇、市民悲劇を中心に論文を書き、授業でも、家族像や恋愛観など身近な人間関係の話をすることが多いです。そんな私がなぜ地球規模のコスモポリタニズムに取り組んでいるのかというと、答えは単純で、市民悲劇を書いたレッシングやシラーが、自分はコスモポリタンだと再三表明していたからです。コスモポリタニズムを調べるなかで、ヴィーラントの文章も読むようになりました。

調べるうちに気づいたことですが、「コスモポリタニズムと私的領域」は一見かけ離れているようでいて、じつはそれほど突飛な組み合わせでもありません。ふたつとも、社会の論理に取り込まれていない「人間本来のあり方」のようなものが問われるときによく浮上し、保守的イデオロギーとも往々にして結びつく一方で、社会を批判的にとらえなおすための視座としては大きな可能性を有してもいます。封建社会からの脱皮が始まった啓蒙時代においても、所与の問題構造を目に見えるものにしようとするときに、世界と私的な人間関係がともに社会批判的な「人間性」の拠点として引き合いに出されていました。現在でも、脱領域的に広がる世界と、最も身近な人間関係は、目の前の構造的な矛盾を炙り出す重要な足がかりでしょう。啓蒙時代における社会批判的な「人間性」の核は「自律」や「自由」でしたが、近年では「ケアの倫理」などにおいてむしろ「依存」ということが前面に出されています。

公的領域のあり方を新しく模索せねばならない岐路にある点で、現代はヴィーラントの時代と似通ってもいます。啓蒙の公共圏構築の立役者だった彼の守備範囲はあまりにも広く、私はまだその全貌をつかみきれしていません。これからも、「コスモポリタニズム」と「私的領域」に注目しながら公的領域のあり方について考えてゆくつもりですが、その際にヴィーラントは汲み尽くせない刺激の宝庫であり続けると思います。

(京都大学教授)

このたびは日本独文学会・DAAD 賞をいただき、大変光栄に存じます。コロナ禍のもと、さまざまな制約の中で選考委員会等が開催されたことと思います。いつにも増してご多忙な中、審査くださった皆さまをはじめ、担当理事、学会運営に携わる先生方に心よりお礼申し上げます。

受賞対象となった „Relativsatzeinleitungen in der Nürnberger Stadtsprache aus dem 16. Jahrhundert — Eine historisch-soziolinguistische Analyse“ (『16 世紀ニュルンベルクの都市言語における関係詞について — 歴史社会言語学的分析』) は、2017 年にマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクに受理された博士論文を手直しし、2020 年に出版したものです。

ドイツ語史研究、特に初期新高ドイツ語研究の重要な課題の一つは、一都市における言語の不均質性を明らかにし、その不均質性の変遷について考察を行うことですが、本書では、16 世紀のニュルンベルクに着目し、この課題に取り組みました。具体的には、当時のニュルンベルク市民が執筆した、もしくはニュルンベルクで出版されたテキストに関し、「官庁 (公的書簡)」、「一般市民男性 (私的書簡等)」、「一般市民女性 (私的書簡)」、「専門書 (美術理論書等)」、「宗教的教養書」、「ビラ・パンフレット」という六つのグループを作り、16 世紀における関係詞の分布の変化をグループごとに調査し、調査結果を互いに比較した上で、グループ間で見られる変化の相違についてその要因を分析しています。

さまざまな事情 — 最後はコロナ禍の影響 — により着想から出版まで 20 年近くかかってしまいましたが、本書が世に出るまでの道筋にあらためて目を向けますと、大学・大学院時代、福岡大学赴任後、ドイツでの在外研究時の恩師やお世話になった先生方、同僚、研究仲間から折あるごとにご指導、ご教示、ご意見、ご助力をいただき、それらにより自分の研究が大きく展開したことに思い至ります。また、研究者以外、例えば、ドイツの図書館の司書の方にも、貴重書の閲覧や複製許可のために館長と交渉していただくなど、大変お世話になりました。本書の執筆を通して、個人の研究であっても、それは実のところ、学問に惜しみなく貢献する方々に支えられており、そのような方々との出会いに恵まれてこそ成立するものなのだということを実感いたしました。お世話になった皆さまへの感謝の気持ちを忘れずに、今後も研鑽を積んでまいります。

(福岡大学教授)

このたびは第 19 回日本独文学会・DAAD 賞に拙著をお選びいただき、身に余る光栄です。審査の任にあたってくださった選考委員の皆様には感謝の念に堪えません。なお、本書は 2018/2019 年冬学期にベルリン自由大学に提出した博士学位論文に加筆・修正を施したものです。ドイツおよび日本での研究生活のなかでご指導ご鞭撻いただいた皆様のご助力なしには、本書がこのようなかたちで成立することはありえませんでした。改めまして篤く御礼申し上げます。

映画をめぐるドイツ語圏の初期言説にかんする研究環境が整備され始めたのは、この新しいメディアについて文学者たちのあいだで戦わされた、いわゆる〈映画論争〉(1909-1929 年)が編纂・出版された 1970 年代末のことでした。とはいえ、主に 1990 年代前後に出版されたいくつかの古典的な研究書をのぞけば、近年の研究は、当時の映画言説一般というよりも、むしろ個々の作家や作品と映画との関係に対象を限定する傾向にあるようです。その原因のひとつはおそらく、当該分野における膨大な研究資料とその主題的な多様性にあると言えるでしょう。

本書につながる研究の開始当初から、私は当時の映画言説において広く使用されている隠喩法に注目し、作家や主題といった従来の分類基準とは異なる新たな見取り図を描くことを目指しました。この方法的選択はいくつかの幸福な副産物をもたらしました。まず、同時代の隠喩理論をはじめ、感情移入美学や生理学的人間学、細菌学など、異質な諸分野と映画言説との領域横断的な連関を顕在化することができたように思います。また、メディア研究の基礎理論としての、そして文学と映画との間メディア的關係を考察する方法としての隠喩論の可能性を示唆し得たとすべうらしい限りです。さらにいえば、隠喩を手がかりに「体系的結晶化の養液」(ブルーメンベルク)に接近することにより、ヴァイマル期以降の映画理論の展開に——不連続をはらみながら——つながる想像力の系譜をいささかなりとも照らし出すことができたのではないのでしょうか。

とはいえ、私の考察はいまだ途上にあると言わざるを得ません。拙著を読み返しますと、十分に展開されておらず、あるいは構想段階にとどまる思考の痕跡がそこかしこに見出されます。このたびの賞は私の今後の研究活動に対する励ましをいただいたものと考え、本書を踏まえながらも、その不足を補い、もしくはその枠組みを発展的に乗り越えるような研究を進めるべく、決意を新たにしております。ありがとうございました。

(法政大学専任講師)

## 日本独文学会 2022 年春季研究発表会報告

2022 年春季研究発表会は 5 月 7 日（土）および 8 日（日）に立教大学にて対面で開催された。参加者数は両日共に学会員 373 名（但し、左記人数は入構証発行人数、受付を行わない方式のため実数は不明）、非学会員 9 名であった。

1 日目は 11:00～18:10、2 日目は 10:00～13:10 に開催された。研究発表会の内訳はシンポジウム 2 本、口頭発表 9 本、ポスター発表 2 本、ブース発表 1 本であった。研究発表に先立ち、ドイツ語学文学振興会賞授賞式・総会、ドイツ語教育部会総会が行われた。また、1 日目の終わりにドイツ語教育部会招待講演が開催された。

研究発表会と並行して、朝日出版社・郁文堂・三修社・第三書房・同学社・白水社・ひつじ書房各書店による書籍展示が行われた。

総会は会計決算の都合上、春季研究発表会では行われず、6 月 4 日（土）に別途オンラインにて開催された。

会計報告は別添の PDF ファイルの資料を参照いただきたい。

（企画担当）

## 2021 年度ドイツ文化ゼミナール・オンライン代替企画 II 報告

2022 年 3 月 13 日から 3 月 15 日にかけて第 62 回ドイツ文化ゼミナールの代替企画である Online-Alternative II が行われた。昨年同様、ベルリン自由大学の Prof. Dr. Hans Richard Brittnacher 氏を講師に迎えることができた。Online-Alternative II の総合テーマは „Die Phantastische Literatur“であった。昨年同様 Online-Alternative II もドイツ学術交流会 (DAAD) から多大なご支援を賜った。実行委員会および参加者はこれに心から感謝している。

2022 年 3 月に予定されていた対面の第 62 回文化ゼミナールは再び不運に見舞われた。2021 年 3 月の Online-Alternative I と同様、実行委員会は再び、対面の文化ゼミナールを中止し、オンラインの代替企画である Online-Alternative II に切り替えざるを得ないこととなった。Covid-19 の変種オミクロンが出現しヨーロッパで感染爆発を起こしたからである。これに対して日本政府は 2021 年 11 月 30 日に外国人に対する入国禁止の措置を取り、また日本人帰国者に対する検疫を強化した。緊急アンケートを行った結果、参加希望者の中に対面式のゼミナールに対する懸念を抱いている人たちがいることも判明した。

さらには企画の直前 2 月 24 日にはロシアのウクライナ侵攻が始まった。ウクライナに無法と暴力が容赦なく侵入したことを傍観するしかないことは悲しいことであった。私たちはまた私たちの無力を痛感するほかなかった。このような危機の状況にあって私たちに何ができるのかを真剣に問わざるをえなかった。できることは残念ながらほとんどない。しかし、それでもいつの日か可能性は低いにしても、世界の悲慘に対抗するためにも現実を直視し、私たちの想像力を目覚めさせておく必要があるという暫定的な結論に至ったのである。私たちのテーマはまさに Die Phantastik なのであるから。

このような陰鬱な状況のもとで代替企画は始まった。

だが他方私たちは、興味を持つ多くの人々、とりわけ若い人々が参加表明をしてくれ、また実際に参加してくれたことに少なからず驚かされた。それは予期せぬ喜びであった。

昨年の Online-Alternative I は講演とディスカッションからなっていたが、今年はグループワークが主であった。実行委員会には、Zoom による企画が問題なく行えるか懸念があった。しかしながら担当の委員の努力と数度に及ぶ練習のおかげで Online-Alternative II を成功裏に終えることができた。

## 総合テーマ：Die Phantastische Literatur

### 参加者：

(アルファベット順, \*\*\*担当理事, \*\*実行委員長, \*実行委員)

Hans Richard Brittnacher (Freie Universität Berlin), Andreas Becker (慶応義塾大学), Stefan Buchenberger (神奈川大学), \*Marcus Conrad (名古屋大学), 益敏郎 (熊本大学), 藤原美沙 (京都女子大学), \*\*\*濱中春 (法政大学), 長谷川晴生 (東京理科大学), 橋本紘樹 (松山大学), 林弘晃 (九州大学), 池中愛海 (慶応義塾大学), \*磯崎康太郎 (福井大学), Marcus Joch (慶應義塾大学), 假谷祥子 (神戸大学), 小林英起子 (広島大学), 香田芳樹 (慶応義塾大学), 桑川麻里生 (慶応義塾大学), \*\*桑原聡 (新潟大学), 牧野広樹 (立命館大学), \*森口大地 (京都大学), 村上浩明 (長崎外語大学), 中村大介 (慶応義塾大学), \*二藤拓人 (西南学院大学), 西田知奈美 (東京大学), 大林侑平 (名古屋大学), 小崎肇 (広島大学), André Reichart (福岡大学), \*Manuela Sato-Prinz (DAAD・慶応義塾大学), \*Eberhard Scheiffle (早稲田大学), Tobias Schickhaus (同志社大学), \*Thomas Schwarz (日本大学), 清水恒志 (東京大学), 菅谷優 (東京大学), 杉山東洋 (京都大学), 高橋優 (福島大学), 高宮純子 (日本大学), 徳永菜摘野 (早稲田大学), \*若山真理子 (東京大学), 渡邊徳明 (日本大学), 山下大輔 (京都大学)

### 総合テーマについて

(総合テーマは2021年と同じであるが再掲する)

Phantastische Literatur (「妖精物語」「幻想物語」「ゴシックノヴェルズ」「SF」等, 広義のリアリズム文学に対立する概念として使われるが, 日本語に対応する概念がないので, 原語を使用する) は, 長らく文学研究において等閑視されてきた。phantastische Literatur は, 文学研究がカルチュラルスタディーズの影響のもとに新しい視野を導入することによって徐々に重要な研究対象として認められるに至った。よく知られているように, phantastische Literatur, 中でも妖精物語と幻想小説がドイツ・ロマン派および世紀末文学において好まれ, さらに 20 世紀に入ると SF が加わることとなった。

妖精物語の超自然の世界では奇跡と変身が不断に起こるのに対し, 幻想小説における超自然の世界は, 「内的統一に加わる亀裂」(R. カイヨワ) として現れる。これらの背後には驚異に満ちた「もう一つの世界・異界」に対する関心・憧憬, あるいは近代に入って顕著となる啓蒙主義の合理主義と自然科学的思考の普遍性志向に対する抵抗が想定される。なぜなら das Phantastische は現実世界の表層的堅固さを前提とするからである。それは意識下に蓄積された社会的・実存的不安, それを乗り越えようとするユートピア像などを梃子に発展する。das Phantastische

の文化的多様性は現実の境界を軽々と越えていく。

この多様性は一方では文化的豊かさを提示すると同時に、研究にとっては定義の難しさを意味する。だがこの定義の難しさは必ずしも欠陥とみなされるべきではないだろう。phantastische Literatur は従来の語りでは十分に表現できない新しい事態—危機，不安，脅威，夢，憧憬など—を描出しようとする努力を通じて新しい表現の可能性を与えようとする。本 Online-Alternative は、後期啓蒙主義から 21 世紀初頭に書かれたテキストの分析を通じ想像力の働きの多様性とその由来，さらには das Phantastische なるものが持ち得る独自の、批判と破壊のポテンシャルを提示し、解明しようとする。

### 3 月 13 日（日）

最初に文化ゼミナール実行委員長より今回の Online-Alternative II に至った経緯と関係者に対する謝辞が述べられ、続いて担当理事および DAAD 日本事務所代表により挨拶と感謝の言葉が述べられた。

### Eröffnungsvortrag

Moderation: Prof. Dr. Hans Richard Brittnacher und Eberhard Scheiffele

本企画は招待講師 Prof. Dr. Hans Richard Brittnacher 氏の基調講演「事故と危機管理 — phantastische Literatur の理論と歴史のために」*Störfall und Krisenmanagement. Zu Theorie und Geschichte der phantastischen Literatur* で始まった。本講演はロジェ・カイヨワからミシェル・フーコー，ツヴェタン・トドロフを経てレナーテ・ラッハマンに至る phantastische Literatur の理論についての大変有益な見通しを与えるものであった。Brittnacher 氏は、das Phantastische を定義するために、従来の、「現実」と「非現実」の秩序というような二項対立的捉え方に代えて、自らの「事故モデル」*Störungsmodell* を紹介された。それによると phantastische Literatur は、社会を決定的に驚愕させ（aufstören），混乱させ（verstören），あるいは破壊する（zerstören）ような「事故」を、現実在先立って思考実験として取り上げ、その「解決策」を模索することができるという。「事故モデル」は従って、「危機を必ずしもカタストロフィーとのみ解する」必要はなく、それを「事態の革新へのきっかけとも理解」し、「phantastische Literatur がもつ、それ本来の、地震計のような敏感・繊細な力を正当に評価する」ことを可能とする、というものである。これが講演題目の「危機管理」という語で意味されているものである。

## Gruppenarbeit

今回も従来通り4つのグループワークを設けた。(但し、1グループワークは従来4グループで構成していたが、今回は初のオンライン実施に不安があったことから3グループとした。) それらには「空間」「時間」「登場人物」「ユートピア / ディストピア」という下位テーマを設定した。それぞれ1つのテキスト、あるいは複数のテキストに基づいて文学における *das Phantastische* について具体的に論じた。3つのグループワークが終わった後に中間のまとめとして全体討論を、また Brittnacher 氏の最終講演の後に暫定的総括の全体討論を行い、参加者が他のグループワークのディスカッションでの成果を共有できるように配慮した。Gruppenleiter には前もってそれぞれのディスカッションの内容を短くまとめ、あるいは参加者の一人にまとめてもらい、それを全体討議で発表するよう依頼してあった。本報告書では残念ながら、それぞれの内容まで記載することができなかったが、Gruppenleiter 各位には忙しい中 *Leitung* を引き受け、議論をスムーズに運んでいただいたことに心より感謝したい。

3月13日(日)

### Gruppenarbeit I: Raum

I-A: Franz Kafka: *In der Strafkolonie*

Gruppenleiter: Hiroaki MURAKAMI

I-B: Georg Heym: *Das Schiff*, Marie-Luise Kaschnitz: *Schiffsgeschichte*

Gruppenleiter: André REICHART

I-C: Theodor Storm: *Der Schimmelreiter*

Gruppenleiter: Hisashi SHIMIZU

Freie Diskussion in Breakout-Räumen

3月14日(月)

### Gruppenarbeit II: Zeit

II-A: Wilhelm Heinrich Wackenroder: *Ein wunderbares morgenländisches Märchen von einem nackten Heiligen*

Gruppenleiter: Yuhei OBAYASHI

II-B: Ludwig Tieck: *Die Elfen, Der Runenberg*

Gruppenleiterin: Shoko KARIYA

II-C: Franz Kafka: *Vor dem Gesetz*

Gruppenleiter: Daisuke YAMASHITA

### **Gruppenarbeit III: Figuren**

III-A: Ingeborg Bachmann: *Undine geht*, Friedrich de la Motte Fouqué: *Undine* (15. Kap), J. W. v. Goethe: *Der Fischer*, Heinrich Heine: *Ich weiß nicht, was soll es...* (*Buch der Lieder*)

Gruppenleiter: Hiroki HASHIMOTO

III-B: J. W. v. Goethe: *Faust I Homunculus*

Gruppenleiter: Jun TANAKA

III-C: Heinrich von Kleist: *Das Bettelweib von Locarno*, *Die heilige Cäcilie oder die Gewalt der Musik*

Gruppenleiter: Toyo SUGIYAMA

Diskussion:

Moderation: Prof. Dr. Hans Richard Brittnacher und Marcus Conrad

Freie Diskussion in Breakout-Räumen

3月15日 (火)

### **Gruppenarbeit IV: Utopien / Dystopien**

IV-A: Jean Paul: *Rede des toten Christus*, Friedrich Schiller: *Die Größe der Welt*

Gruppenleiter: Eberhard SCHEIFFELE

IV-B: Stefan George: *Algabal*, Paul Scheerbart: *Flora Mohr*

Gruppenleiter: Haruo HASEGAWA

IV-C: Johann Gottfried Schnabel: *Die Insel Felsenburg*

Gruppenleiter: Yu SUGAYA

3月15日 (火)

### **Schlussvortrag mit Schlussdiskussion**

Moderation: Prof. Dr. Hans Richard Brittnacher und Thomas Schwarz

Prof. Dr. Brittnacher 氏の最終講演の題目は「底なしの現実 — phantastische Literatur の中心トポスとしての沼」 *Bodenlose Wirklichkeit – der Sumpf als phantastischer Zentraltopos* であった。Brittnacher 氏は、人を脅かすメタファーとしての沼というモチーフを 18 世紀来の文学史に跡づけ、Phantastik において沼モチーフが「第三者」そのものであることを示した。なぜなら「沼モチーフ」は「二項対立コード化の網をかい潜る」からである。「沼は固体でもなく液体でもなく、大地でもなく、海でも川でも湖でもない。それは死の場である。だが同時に高められた生の場でもある。」最終講演は、基調講演で述べられた理論の優れた例示と

捉えることができた。それに続くディスカッションではこの講演について、グループワークで得られた成果に基づいた議論が活発に行われた。

Online-Alternative II をあらゆる困難にもかかわらず成功裏に終えることができたことについて実行委員会はずべての参加者にこころより感謝する。

(文責:桑原聡)

(付記)

実行委員長は2022年7月下旬にベルリンのBrittnacher氏を訪問し、氏の、3年間にわたる変わらぬご厚情と懇篤なご協力に対して、実行委員会を代表し謝意を表した。

## 第26回ドイツ語教授法ゼミナール報告

第26回ドイツ語教授法ゼミナールは、2022年3月19日から22日まで4日間にわたって開催された。初日からの3日間は、多摩永山情報教育センター（東京都多摩市）において対面形式で、そして最終日は、全員がオンラインで参加するという二部形式で行われた。

招聘講師である、ボーフム大学（Universität Bochum）の Karin Kleppin 教授（以下「Prof. Kleppin」と表記）は、新型コロナウイルスの新たな変異株の世界的な感染拡大により来日が困難となったため、プログラムの一部（講演、ディスカッション）に、ドイツからオンラインでの参加となった。

Prof. Kleppin の専門分野は、ドイツ語教育、カリキュラム開発、学習評価、試験およびテスト開発である。教授は、外国語教育におけるテスト考案の分野においての第一人者であり、試験作成に関する研修やセミナーをさまざまな国で実施し、教員養成にも力を注いでいる。また、TestDaF の考案に参加されているほか、長年、ベルリン・フンボルト大学の教育品質改善研究所（Institut zur Qualitätsentwicklung im Bildungswesen an der Humboldt Universität zu Berlin）と協同して、テスト問題の開発研究にも携わってこられた。

ゼミナールのテーマおよび参加者は以下の通りである。

総合テーマ：「試験・テスト・評価-実践と研究の試み」（Prüfen, Testen, Evaluieren – Ansätze für Praxis und Forschung）

参加者：\*Cezar Constantinescu（明治学院大学）、\*\*Olga Czyzak（麗澤大学）、Regine Dieth（同志社大学）、David Fujisawa（獨協大学）、Martina Gunske von Kölln（福島大学）、Anja Hopf（新潟大学）、堀口順子（九州大学）、亀井明子（奈良女子大学）、Ruben Kuklinski（東京大学）、草本晶（麗澤大学）、Angela Lipsky（上智大学）、\*村元麻衣（名古屋大学）、\*Frank Nickel（帝京大学）、Oliver Phan-Müller（Goethe-Institut）、齋藤正樹（早稲田大学）、\*坂本真一（立教大学）、\*Manuela Sato-Prinz（DAAD Tokyo）、Maria Gabriela Schmidt（日本大学）、Marco Schulze（中京大学）、Christian Steger（獨協大学）、\*武井佑介（立命館大学）、Bertlinde Vögel（大阪大学）、Eva Wölbling（東京芸術大学）、Nancy Yanagita（上智大学）、（アルファベット順、\*\*実行委員長、\*実行委員）

## 第 26 回ドイツ語教授法ゼミナールプログラム

	19.03	20.03	21.03	22.03
Vormittag		Gruppenarbeit/ Workshop	Gruppenarbeit/ Workshop	(via Zoom) Eigene Aufgaben erstellen / Präsentationen und Empfehlungen
		Teilnehmendenvortrag	Zwischenfazit	
Nachmittag	Anreise	Teilnehmendenvortrag	Abreise	
		Austausch für Kooperation		
	Vortrag I und Diskussion zu Vortrag I	Vortrag II und Diskussion zu Vortrag II		
Vorbereitung der Gruppenarbeits- phase	Vorbereitung der Gruppenarbeitsphase			
Abend	Aufwärmphase	Zeit zum kollegialen Austausch		

### 1. 招待講師による講演とワークショップ

Prof. Kleppin による講演は、4 日間で計 2 回行われた。講演は、前述の理由により、Zoom を用いて会場で視聴する形式が採られた。講演中に提示された課題に対するディスカッションも同時に行われ、その時間は、各回とも 3 時間（計 6 時間）に及んだ。

試験あるいはテスト（「試験」と「テスト」は同義）は、外国語教育においてもかすことのできないものである。なぜなら、それらは、学習の進度や定着度の確認や測定を通じて、学校教育全般における成績評価の土台を形成しているからである。適切な試験問題を作成することは、教師の重要な役割のひとつとなっている。しかしながら、個々人の言語能力を、一体どの程度まで正確に測ることが可能なのか。また、特定の学習者層にとって意義のあるテスト形式とはどのようなものなのか。あるいは、試験そのものを評価する手立てとは何であろうか。

こうした疑問から、本講演は、掲げられたテーマである「試験・テスト・評価」に従って進められた。前半では、試験・テスト・評価の領域を巡る基礎的な知識

に重点が置かれ、後半では、言語能力の測定に適した独自の試験問題を作るために必要な手順が語られた。

なお、Prof. Kleppin によって提示されたワークショップの内容は、前日の教授の講演内容と対を成したものとなっている。

### 【講演 1】

講演は、試験・テスト・評価の領域に関わる基礎知識の獲得から始められた。

TestDaf や Goethe-Institut による検定試験といったドイツ語能力試験のみならず、大学等で実施される定期試験、授業中の小テストに至るまで、試験あるいはテストには、それぞれの目的と用途が設定されている。試験を実施する際、教員には、それら用途に応じて実施方法、形式や構成、評価の種類を使い分ける能力が求められる。併せて、試験問題の信頼性や妥当性といった試験の有用性についても検討されねばならない。また、どのような形式であっても、試験というものは、学習者には否が応でも何らかの影響を与えるものである。そのため、極力、ネガティブな影響を抑え、学習そのものに対するポジティブな影響を引き出すことが重要であり、それには、試験を言語行為中心的 (handlungsorientiert) に行う必要がある。言語行為中心のおよび能力中心的 (handlungs- und kompetenzenorientiert) な形式の試験作成においては、その中で使用される素材や場面に、学習者が実生活で直面する言語使用状況がどれだけ反映されているかが問われることとなる。

この講演中にはグループで取り組む課題も出されたが、そこでは、対象となる学習者にとって重要で、しかも、可能な限り自然であるような文脈での言語的活動を測る設定が検討され、活発に意見が交わされた。さらに、実際に使用されている言語能力試験や、それに関連した練習問題などについて、それらが言語能力の測定を目的としていながら、しかも、どのように言語行為中心的でもあり得ているかが分析・検証された。

### 【ワークショップ 1】

前半は、前日の講演 1 の内容をどの程度理解しているかについて、参加者がペアを組んで、それぞれインタビュー形式による口頭試験によってチェックし合った。その際、理解内容を確認するのみならず、インタビューを取り入れた口頭試験という形式を用いた場合に、それが学習者にどのような影響を与えるかについても観察するよう求められた。この点については、口頭試験が学習者にもたらす心理的な側面や、試験内容の真正性 (Authentizität) に関する指摘があった。

それに続いて、講演で扱われた様々な試験形式の内、参加者が、今後、自身が作成する試験に使用したいものを挙げ、その目的や理由、予想される学習者の反

応などを、6つのグループに分かれて話し合った。それらの内容は、グループ毎に Moodle に入力されることで、相互に参照し合える発表となった。

### 【講演 2】

2日目の午後の講演では、講演1の内容を踏まえ、良質な試験問題を作成するための手順について、試験の設計、実施から採点、評価に至るまでの一連の流れが考察された。妥当性を考慮した、信頼性の高い、言語行為中心的な試験を、参加者が作成できるようになるために、講演中には、さまざまな方法による実例が提示された。前日と同様に、それらの実例はグループで論議され、検討が加えられた。

試験問題を作成する際には、学習者の習熟度レベルを客観的に記述し、個々の学習段階で測定可能な一貫性のある評価基準を定める必要がある。しかし、その基準は、学習者の到達度・達成度を評価するためのツールとしてのみ使用されるべきではない。それは同時に、学習者の学習プロセスをも評価するものでなくてはならない。つまり、評価そのものの意義だけではなく、学習者にさらなる学習を促す仕組みが、試験実施の一連の流れの中に組み込まれている必要がある。教員には、それ故、評価基準を明確に打ち出すにとどまらず、その基準を学習者の学習活動における関わりの中でどのように活用していくかが求められている。

### 【ワークショップ 2】

3日目となるワークショップ2もグループワーク形式で行われた。„Wie erstellt man gute Aufgabe?“をテーマに、実際に試験問題を作成した。作成にあたり、先ずは各グループ内で方向性を定めることが求められた。ここでは、試験問題を完成させることではなく、その作成の過程がより重要であった。

### 【プレゼンテーション】

最終日は、Zoomによるオンライン形式で行われた。前日のワークショップ2で作成した課題をあらかじめ Moodle に掲示し、それに基づいてグループ毎にプレゼンテーションを行った。それぞれに実践的な試験問題を作り上げることができた。その後、プレゼンテーションの内容に関して、またさらに、これまでのゼミナールの内容全体に対して、参加者全員による意見交換や振り返りがなされた。

## 2. 参加者による発表

2日目の午前と午後に、参加者による発表が行われた。発表のタイトルは、発表順に以下の通りである。

- Maria Gabriela Schmidt: Formatives Assessment im Deutsch-als-Fremdsprache-Kontext in Japan
- Nancy Yanagita: Portfolioarbeit bewerten – Ja? Aber wie?
- Oliver Phan-Müller: Deutsch Lehren Lernen (DLL) – Das Fort- und Weiterbildungsprogramm des Goethe-Instituts am Beispiel DLL 7: Prüfen, Testen, Evaluieren (発表順)

また、2 日目午後には参加者が関心のある研究テーマについて、共同研究者を募る機会も設けられた。今回提案されたテーマは „Ein Kurskonzept zur Einführung in wissenschaftliches Präsentieren und Schreiben auf A2 bis B1“ と „Task-Based Learning (TBL) im Unterricht und am Semesterende die Benotung / Bewertung der Studierenden“ であった。

### 3. 総括

3 年振りに対面での開催となった、今回のドイツ語教授法ゼミナールでは、Prof. Kleppin の講演をベースとして、講演中に提示されたグループワークやその後のワークショップにおいて、良質な言語テストを作成するために意識すべき点について、さまざまな角度から俯瞰する機会を得ることができた。小テストから学期末試験、語学検定試験に至るまで、言語教育においては、試験の実施と評価が一体を成して、核となっていることを再認識させられた。また、評価において明確な基準を示すことが、学習者の自律的な学びへと繋がるという点についても実感させられた。それ故、このゼミナールで得た知識や経験が、実際の試験作成のみならず、今後のより良い授業作りの基盤になるであろうことは言うまでもない。

本ゼミナールでは、冒頭に述べたように、Prof. Kleppin の来日を、残念ながら実現できなかったものの、Prof. Kleppin と参加者との間の質疑応答やディスカッションは十分に行われ、その効果においては、対面での場合と比べても何ら遜色がなかったとすることが出来る。なお、セミナー会場では検温や消毒など、開催にあたってのコロナ対策には万全の対策がとられていた。

最後に、ゼミナール実施にあたり、例年同様、ドイツ学術交流会 (DAAD)、日本独文学会、Goethe-Institut から多大なご支援を頂戴したことに對し、この場を借りて、あらためてお礼を申し上げたい。

(文責：亀井明子)

## 2021 年度ドイツ語教員養成・研修講座報告

### 1. 本講座の運営について

ドイツ語教育部会，東京ドイツ文化センターとの共催で開催している「ドイツ語教員養成・研修講座」は，2021 年 10 月から Zoom による全面オンライン開催に移行し，全国からの参加が可能となっている。受講者は，ワークショップへの参加に加え，各モジュールのテーマについてレポートを作成し提出することが求められる。また，専用のプラットフォームである Moodle 上では，受講者同士，また受講者と講師の間でドイツ語教育をめぐるディスカッションが展開され，受講者・講師双方にとって，ドイツ語教育について再考する刺激的な議論の場となっている。

### 2. 2021 年秋開講のコースについて

2021 年秋開講のコースは，時流に合わせて講座目的の見直しを行い，それに合わせて講座内容も充実させている。前期が 2021 年 10 月から 2022 年 7 月までの 8 回のワークショップで 7 モジュール，後期が 2022 年 10 月から 2023 年 9 月までの 8 回のワークショップで 4 モジュールならびに *Deutsch Lehren Lernen 4*（以下 DLL）の課題，計 11 のモジュールからなる。前期コースには 21 名の受講者が参加し，2022 年 7 月の時点で第 8 回ワークショップまで終了した。

後期コースのワークショップ開催予定ならびにモジュールのテーマは以下のとおりである。

後期コース(2022年10月—2023年9月)

ワークシ ョップ	日付	ワークショップとモジュールのテーマ	
		前半	後半
1	10月	外部講師による講演	<b>M8:</b> ランデスクンデと異文化理解
2	11月	DLL 導入ワークショップ	
3	12月	M8 のレポートの評価と 討論	<b>M9:</b> 様々なメディアと ICT の導入
4	1月	M9 のレポートの評価と 討論	DLL4, PEP の準備
5	4月	DLL4, PEP の準備	<b>M10:</b> テストと評価
6	6月	Praxiserkundungsprojekt (PEP) プレゼンテーション	
7	7月	M10 のレポートの評価と 討論	<b>M11:</b> 学習者の動機づけと インターアクション
8	9月	M11 のレポートの評価と 討論	講座の総括

## 日本独文学会研究叢書既刊一覧

Nr. 149 アヴァンギャルドの運動表象

[Darstellungen der Bewegung in der Literatur und Kunst der historischen Avantgarde]

編集者: 小松原由理

執筆者: 小松原由理, 小松原由理, 西岡あかね, 山口庸子, 柴田隆子

発行日: 2022. 5. 7

## 支部報告

### 北海道支部

○ 6月14日に幹事会が開かれ、本年度の研究発表会（本年度より年1回に変更）を、12月10日か17日に開催することを決定した。

○ 7月16日に、北海道立道民活動センター「かでの2・7」において、九州大学大学院人文科学研究院独文学講座主催、北海道支部及び小樽商科大学後援でウルリヒ・バイル九州大学教授による講演会が開かれた。題目は以下のとおり。

„Die (Un-)Möglichkeit nein zu sagen. – Reflexionen über Ungehorsam und Literatur –“

○会員数：57名

### 東北支部

○機関誌『東北ドイツ文学研究』第62号（2021年）を2022年3月31日に刊行した。内容は下記の通り。

- ・斎藤成夫「エディプス／ポストモダン劇としてのレッシング『賢者ナータン』」
- ・田中岩夫「節蔵（『灰燼』）とメフィスト、あるいは「ニヒリズム」の行方（承前）-鷗外と『ファウスト』（その四／2）」
- ・嶋崎順子「バイロイトの二人の巨人-ジャン・パウル『巨人』とワーグナー『ニーベルングの指輪』の比較・考察の試み」
- ・畠中美菜子「ホフマンスタール散文作品の重層構造-「第672夜のメルヘン」から「アンドレーアス」まで」

○第64回研究発表会は、2022年11月12日（土）宮城地区開催あるいはオンライン開催で調整中。

### 北陸支部

○2022年2月28日付で『ドイツ語文化圏研究』第18号を発行した。

## 関東支部

○2022年6月12日（日）に Zoom にて総会が行われ、昨年度の活動報告ならびに今年度の活動方針について議論がなされた。

○2022年12月11日（日）に第13回関東支部研究発表会を Zoom によるリアルタイム配信で行う予定。現在発表者を募集中（締め切りは9月30日（金））。詳細は関東支部ホームページを参照のこと。

## 東海支部

○会員数：112名（うち2名は新規会員，2021年7月9日時点）

○2022年度日本独文学会東海支部夏季研究発表会

日時：7月10日（土曜日）14時より

場所：ビデオ会議 zoom を用いたオンライン会議

研究発表

- 1) 太田達也/鈴木友美加：DaF をめぐる誤解と DaF 研究の近年の動向
- 2) Oliver Mayer/Marcus Conrad：Kurrentschrift und Sütterlinschrift lesen und schreiben – persönliche Anmerkungen und Lerntipps
- 3) 梶浦直子：ドイツ語学習者の外国語不安

参加人数 33名

○懇親会

研究発表会終了後，Zoom のブレイクアウトルームを用いて開催

○2022年秋に，機関誌『ドイツ文学研究』第54号を発刊予定，12月10日（土曜日）午前中に合評会を予定。

○2022年度総会・冬季研究発表会の開催について

12月10日（土曜日）の午後を予定，現在のところ対面形式で，会場は名城大学を予定。

## 京都支部

### ○2022 年度春季研究発表会

日時：2022 年 7 月 2 日（土）13：30～17：20

会場：立命館大学 衣笠キャンパス 存心館 2 階 ZS203 教室

参加者数：43 名

研究発表：

1. ムーヅル『特性のない男』における〈遙かな愛〉と兄妹愛  
白坂 彩乃 氏（京都大学大学院生）
2. 18 世紀の陰謀論—反革命誌『オイデモニア』（1795-98）とその周辺における「真実」言説  
須藤 秀平 氏（京都大学）
3. 発話末の aber についての会話分析的考察  
中野 英莉子 氏（岡山大学）

○2022 年度秋季研究発表会・総会は 11 月 12 日（土）に京都大学で開催予定。

○学会誌『Germanistik Kyoto』について

2000 年より年 1 回刊行。2022 年 9 月頃に第 23 号刊行予定。

○「読み切りブックレット ドイツの文化」について

2016 年より出版助成を開始。2022 年 5 月に第 3 巻を刊行。

岡部亜美『空間表現研究の諸相—ドイツ語とオランダ語の所在動詞を例に—』

○会員数：140 名（2022 年 8 月 18 日現在）

## 阪神支部

○2022 年 3 月 25 日に機関誌『ドイツ文学論攷』第 63 号（全 128 ページ）を発行した。掲載論文・書評等は以下のとおり。

### ◆論文

・假谷祥子：ポエジーの〈形象化〉— ノヴァーリスにおける象徴概念をめぐって —

・SABURI Hirokazu：Pertinenzdativ- und Pertinenzakkusativkonstruktion:

Ein konstruktionsgrammatischer Ansatz

- ・林英哉：ヘルダーリンのペーレンドルフ宛書簡における古代ギリシャ・近代文学観 — シラーの「素朴文学と情感文学」から「固有なもの」と「異質なもの」へ —
- ・増本浩子：われらが英雄ソソ・ロバキゼ — ブレヒトの『コーカサスの白墨の輪』とソ連併合後のコーカサス —

◆書評

- ・山本惇二 著：『モーリッツとその同時代人たち — ドイツ啓蒙主義・古典主義・初期ロマン主義』（長谷川健一）
- ・佐藤清昭（編・解説）：ドイツ語「関口文法」への誘い 1『関口存男の言葉』（宮下博幸）
- ・石田勇治（編集代表），佐藤公紀，柳原伸洋（編集幹事），木村洋平，宮崎麻子（編集委員）：『ドイツ文化事典』（熊谷哲哉）
- ・水野博子 著：『戦後オーストリアにおける犠牲者ナショナリズム — 戦争とナチズムの記憶をめぐる』（中村綾乃）

○第 72 回総会・第 237 回研究発表会

日時：2022 年 4 月 3 日（日）13:30～

場所：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス F 号館 102 教室

参加者：33 名

総会

- 1) 幹事諸報告：庶務，会計，編集，企画，渉外，支部選出理事
- 2) 審議事項：
  - ・2022 年度予算について

研究発表

- 1) 山下仁（大阪大学）：ジークフリート・イエーガーの装置分析について
- 2) 北岡志織（大阪大学）：演劇批判としての演劇 —公共劇場における難民演劇に関する一考察—

○第 238 回研究発表会

日時：2022 年 7 月 9 日（土）13 時 30 分から 17 時 00 分（オンライン開催）

参加者：39 名

研究発表

- 1) 畑一成（大阪経済大学）：色彩探求とグランド・ツアー
- 2) 小西優貴（関西大学大学院博士後期課程）：ドイツの小学校ドイツ語科教科書における移民背景を持つ人々の多言語背景と多言語使用に関する描写の分析

3) 武井佑介 (立命館大学) : 初級ドイツ語学習者がディスコースマーカを必要とする会話場面 —ドイツ語会話内に出現するドイツ語及び日本語ディスコースマーカ分析—

○2022年8月17日現在の会員数は206名

#### 中国四国支部

○2022年度研究発表会などについては、10月29日(土)に岡山大学にて実施する予定である。なお、実施方法については、対面を原則としつつ、10月以降の感染状況によってはオンラインに切り替える可能性がある。懇親会はおこなわない。

○2022年7月20日現在の会員数については、会員76名、賛助会員5社である。

○春号における報告において、2021年度の研究発表会などの実施は愛媛大学においてであるとしていたが、松山大学の誤りであった。お詫びとともに付記しておきたい。

#### 西日本支部

○2022年11月26日(土)・27日(日) 西日本支部第74回総会ならびに研究発表会を鹿児島地区にて開催予定。

○機関誌『西日本ドイツ文学』第34号の編集作業が進行中。(今秋発行予定)

○インターユニ西日本は一昨年度、昨年度に引き続き中止。

○第5回九州ドイツ語スピーチコンテスト2022年(協賛)

Deutschsprachiger Redewettbewerb in Kyushu 2022

投稿〆切: 2022年10月16日(日)

オンライン開催 (<https://redewettbewerb-in-kyushu.jimdofree.com>)

○会員数(2021年7月25日現在): 143名

## ドイツ語教育部会報告

### 1. 総会

2022 年日本独文学会春季研究発表会（会場：立教大学）に合わせ、2022 年 5 月 7 日（土）にドイツ語教育部会 2022 年度総会（オンライン）が開催された。議題は以下の通りである。

#### I 報告事項

1. 2021 年度活動報告
2. 幹事選出細則の改正
3. その他

#### II 審議事項

1. 2021 年度決算報告
2. 2022 年度予算について
3. 監事嘱任について
4. 『ドイツ語教育』の J-STAGE 公開範囲について
5. その他

#### III 会員からの意見開陳

「II 審議事項」の「2. 2022 年度予算について」は、原案通り承認された。また、「3. 監事嘱任について」では、2021 年度の監事 2 名（松岡幸司氏、吉満たか子氏）のうち松岡幸司氏の任期が満了となったため、2022-2023 年度幹事として林良子氏が推薦され、承認された。

### 1. 編集

- 1) 『ドイツ語教育』第 26 号を 2022 年 3 月 20 日に発行した（編集長：鷺巣由美子幹事）。第 26 号では特集「複言語教育と教師」およびフォーラム「自動翻訳とドイツ語教育」を組んだ。
- 2) レジユメの形式について検討し、27 号以降、論文と研究ノートに日独、独英いずれかの 2 言語でレジユメを付すこととした。

### 2. 部会長

- 1) 清野幹事とともに、2021 年 7 月 29 日にオンラインで開催された IDV-

Vertreter\*innenversammlung に参加した。このときに行われた幹事選挙にあたっては、選挙管理委員を務めた。

- 2) 2022年3月28日に、Goethe-Institut Tokyo で行われたドイツ語オリンピック (Internationale Deutscholympiade 2022) 国内予選に審査員として参加した。

### 3. 企画

- 1) 2021年6月5日(土)にZoomにて教育部会主催講演会(13:25~14:25)およびワークショップ(14:40~15:40)を開催した。  
講師：吉村雅仁氏(奈良教育大学)  
題目：「初等中等教育における多言語教育実践の成果と課題：複言語教育に向けて」
- 2) 2021年9月4日(土)15:00~17:00にZoomにてオンラインイベントを開催した。  
講師：岩居弘樹氏(大阪大学)  
題目：「オンライン授業におけるテストと評価—いつ、どこで、何を、どのように—」
- 3) 2021年11月7日(土)14:30~18:30にZoomにてワークショップを開催した。  
講師：Elbers, Mascha氏(Goethe-Institut Tokyo)  
題目：„Tipps für einen interaktiven Online-(Live)-Unterricht“
- 4) 2022年2月18日(金)に第9回JaF-DaFフォーラムをJaF-DaF Forum 実行委員会が主催、そして本部会が共催となり開催した。

### 4. 大学入試問題検討委員会

- 1) 独立行政法人大学入試センターからの依頼に基づき、大学入試問題検討委員会は、「令和4年度大学入学共通テスト(ドイツ語)の試験問題に関する意見・評価」(本試験および追試験)を太田達也部会長の名義で作成し、2022年2月25日付けで大学入試センターに提出した。評価書の作成は、太田達也部会長の他、野村幸宏幹事、田中雅敏幹事、牛山さおり、山田香織の各委員が担当した。
- 2) 2022年日本独文学会春季研究発表会1日目と2日目に予定していた2022年度大学入試問題の展示は、展示会場の感染リスク回避等の対策が困難であると判断し、中止とした。

#### 5. ドイツ語教員養成・研修講座

日本独文学会および東京ドイツ文化センターとの共催で開催されている「ドイツ語教員養成・研修講座」は、2019年～2021年期は、2021年9月をもって終了した。2021～2022年期は2021年10月よりオンラインで開催されている。参加者は22名である。

会員数（2022年8月5日現在）は、正会員424名、準会員73名、賛助会員9団体の計506名／団体である。

（文責：境一三）

## 2022 年度岩崎奨学金（出版助成）について

2020 年度に岩崎奨学金は、若手研究者のための出版助成に改定されました。2022 年度は、申し込みがありませんでした。

なお、岩崎奨学金（出版助成）の概要は、下記のとおりです。

### 【奨学金の趣旨】

日本独文学会は、故岩崎英二郎先生のご遺族からいただいた寄付金で「日本独文学会岩崎奨学金」を創設し、若手研究者の育成のために国際学会の発表に対しての奨学金を支給してきましたが、必要とされている援助を行うという観点から、この度より若手研究者の研究成果公開のための奨学金制度へと改定することになりました。

### 【奨学金の概要】

1. 博士論文の出版に際して、テニユア職を持たない会員に対して、30 万円を上限に出版費用の助成を行う。
2. 奨学金の支給は年度総額の上限を設定する（2020 年度については 60 万円）。また、同一会員への支給は1回のみとする。
3. 募集は年度毎に行い、日本独文学会ホームページその他の手段で会員に広く公示する。
4. 奨学金は 2020 年 4 月より募集を開始する。
5. 奨学金の返済の義務はない。ただし、支給後に、申請対象の研究書の出版を中止した場合、受け取った奨学金を返還するものとする。
6. 他の出版助成を受けることは可能であるが、本奨学金と合わせて出版費用を超えないこと。
7. 奨学金を受けようとする者は、決められた書式の申請書類を日本独文学会事務局に提出する。
8. 審査は日本独文学会常任理事会内に設けた審査委員会が行う。審査委員会は、外部の専門家に審査を依頼することができる。審査の結果適当と認めた場合、奨学金を支給する。
9. 奨学金の原資を使い切った時点でこの事業を終了する。また、事情により、予告なしにこの事業を終了することもある。

**【募集人数】**

各年度 2 件～3 件程度。

**【応募資格】** 以下の条件をすべて満たす者。

1. 日本独文学会員。
2. テニユア職を持たない者。

**【応募方法】**

1. 下記の必要書類を日本独文学会事務局へ郵送する。a) と b) に関しては同時にファイルを電子メールで hojo@jgg.jp 宛に送付する。
2. 応募締め切り：毎年 6 月 30 日
  - a) 奨学金申請書 (3 種類), 書式 (3)
  - b) 原稿
  - c) 誓約書
  - d) 博士論文の審査に合格したことを証明する文書

**【選考方法】**

1. 提出された申請書を日本独文学会常任理事会で審査する。
2. 必要に応じて, 審査委員会外の専門家に審査を依頼することがある。
3. 申請から 3 ヶ月程度で申請者に採否を通知する。

## 大学院 Germanistik 関係博士論文題目

日本独文学会ホームページの「博士学位取得情報登録フォーム」(<https://www.jgg.jp/mailform/dsrtn/>)に執筆者ご本人から寄せられた情報は、ニューズレター上に掲載されます。2022年4月15日から2022年9月13日までの期間については、申告がありませんでした。

なお、申告済みの情報は下記 URL でご覧いただけます（検索欄への入力無しに「送信する」をクリックすると、全件表示されます）。

[https://www.jgg.jp/mailform/prom/prom\\_src.php](https://www.jgg.jp/mailform/prom/prom_src.php)

## あしがき

「ニュースレター」2022年秋号（Info-Blatt 第7号）をお届けします。各種のご報告ならびにご案内をお寄せいただいた皆様，ありがとうございました。引き続き，学会内での情報共有に向けてご協力いただければ幸いです。どうぞよろしくお願ひします。

庶務担当理事 高橋亮介

※「ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ」2022/09/18 追加

## 編集

一般社団法人 日本独文学会庶務委員会

井出 万秀（委員長）

大野 寿子（編集担当） 高橋 亮介（編集担当） 中野 英莉子（編集担当）

西尾 宇広（編集担当） 馬場 大介（編集担当） 藤縄 康弘（編集担当）

## 編集・発行

一般社団法人 日本独文学会

170-0005 東京都豊島区南大塚

3-34-6 南大塚エースビル603

電話03-5950-1147

振替00160-9-135018

E-Mail（メールフォーム）：

<http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

ニュースレター2022 年秋号

JGG-Info-Blatt / Herbst 2022

2022 年 9 月 14 日発行